

芦田恵之助先生の御教壇は、心を読み、心を聞き、心を書き、心を話すという「心」一点に尽きます。このことは、いつも、身を以て教えて下さっていました。が、修行の浅い私共には、先生の御教壇の内がなかなか分かりません。ほんの形のみを真似て、まごころとか、親切、やさしさ、勇氣などの言葉を連発してしまいました。御教壇の後の話も、日常折々の話も、その時に、お心に強く響いたことのみを語られるので、心を惹かれるだけに終わっていました。

先生の御逝去後、御教壇の内側に近付く指標を、懇切に示して下さいましたのが鈴木佑治先生です。芦田先生の道を歩む具体的な方法を指導してくれたのです。豊かな事実の向こうにある心を、子供達と共に学ぶ方法です。教式に則って文章を読み、立案していくと、文章の隅々までよく眼が届き、ことばと事実と心をつなげた案が立ちます。さらに、教育の中心である所の教壇に立って、教式に則り取扱いを進めていくと、子供達と共に学習を創作しながら、文章の心に浸れるということになります。

五年生の教材に、「海雀」という北原白秋氏の詩があります。その立案と教壇の概略は、次のものです。

一、よむは、一人の音読。三、よむは、黙読して詩を書く。五、よむは、一人の音読。七、よむは、斉読。

海雀

二、とく

(下欄の解説から)海雀は、雀の二倍位の小さな鳥。冬になると、日本各地の海上に群をなして現れる海鳥。群には、雌、雄、老、壮、青、少年など種々。冬の海は冷たく風は寒い。海雀は、点々と散在した姿で群れて、波に浮き、ゆりあげ影失すを繰返す。作者は海辺に立って、見えかくれする群の様子をしばらく見詰めている。作者が心を強く動かされて、この詩を書きたくなったことは何か。

波ひきゆけばかげうする、四、かく(上記の形で全詩を書く。教師も板書。)

海雀、海雀、

銀の  海雀

語義を扱う。詩を三つに分けると、心を強く動かされた所は三番目。強く心の動いたことばは「点」。一番目の「点」は、群を散っているままに見ている点。三番目の「点」

は、一羽一羽に、生きる逞しさを観た  

教式に則り、このように考えてくると、ことばと事実と心が、自分なりに一つになります。教壇が終わると、傍らに来た男子が、「詩は、短いけれど複雑なのですね。」と言いました。顔付きから推して、内容の豊富さの意でありましょう。

教壇を中心に集まる会は、どなたにとっても、新しい出発となります。殊に今回は、樟葉西小学校の皆さんが燃えておられました。学校内に一歩入ると、ピリッと引き締まった空気です。足掛け四日間、良い修行をさせて載きました。有難うございました。

昭和六十二年 新緑

いずみ会会長 山本忠壮